

# 「飼育ニホンザル乳児と代理母（人形）に関する研究」

浅見 千鶴子（お茶の水女子大学）

## 初年度（昭和58年度）

代理母へのアタッチメント形成の過程を全般的に見るため、次の手続によりニホンザル乳児を飼育、観察する。

(1) 観察対象のニホンザル乳児は、実母によって育てられる2頭と代理母によって育てられる4頭の計6頭である。

(2) 生後1週以内に4頭の子ザルを実母から分離し、ケージ内で代理母と一緒にする。生後2～3週間は夜間人間による哺育が補助される。

(3) 代理母は布製、金網製の2種とし、いずれも哺乳装置を持つ。

(4) 母子共生飼育場面は生後90日令までは原則として週2回（15分／1回）、それ以後は、週1回の割で行い、母子間の距離や社会的行動をテレビカメラを通じて観察し、ビデオで記録する。

(5) 母子共生開始2週以降（生後約1ヶ月以降）、代理母飼育ザルに関してはオープンフィールド（180×180×90）内で探索ならびに遊び行動の発現の様子が4～5回（代理母交換等の実験を含む）観察される。その間、嫌悪刺激提示によるアタッチメント形成とその効果を測定する。実母飼育ザルについては隣接ケージを遊び場とし、母親から離れて遊びが発現する様子を観察する。

(6) 母子共生事態で6頭の子ザルを2組づつ対で出会せをし、社会的遊びの発現を観察する。

## 次年度（昭和59年度）

細かな手続は初年度と同じであるが、代理母の種類を変える。代理母はロッキングチェアのような動きをする可動型のもと静止型のもと準備し、可動することによるアタッチメント形成の違いを主として考察するとともに、代理母共生飼育

ザルのデータを蓄積する。

一方、前年度の飼育ザルを母子分離し、出会わせ実験ならびに集団形成を行う。

## 次々年度（昭和60年度）

これまでに性別や出産頭数などの制限によって実現できなかった観察を行う。

初年度飼育されたザルの6頭集団を継続観察する。社会的遊びの頻度、ソシオグラム、順位関係を観察する。

次年度飼育されたザルを母子分離し、出会わせ実験ならびに集団形成を行う。

## 昭和58年度研究報告

今年度は針金製、布製の代理母による哺育を行い、代理母の違いによるアタッチメント形成の差違を比較検討した。また、本物の母親によって育てられた子ザル2頭もコントロールとして観察した。被験体はそれぞれの母親につき2頭づつで、その中2頭が雄である。

ホームケージ内での行動と、オープンフィールドでの遊びや恐怖刺激に対する反応が観察された。その結果、針金製代理母は決して恐怖もしくは嫌悪の対象となることはなく、むしろ探索や遊びの拠点となるし、子ザルの母子分離不安も布製代理母の子どものそれよりもずっと軽度であった。一方、針金母で育てられた子ザルには、接触刺激の不足から、自分の体を抱きしめる行動が頻繁に見られ、また母親が不安を完全に癒せないため音刺激などに過度な反応を示し、情緒的な安定度に欠ける一面が見られた。